

欲求阻止事態における行動の比較心理学的検討

鵜飼 信行

I.

筆者は修士論文のテーマに転位行動 (displacement activity) を選び研究した。この研究は、現在鳴門教育大学長の任にある前田嘉明先生が当時関心を持たれ、指導を受けたものである。

転位行動の概念は、比較行動学 (ethology) を確立した Lorenz, K. の衝動に関する考え方によってよりよく理解できる。Lorenz によると、各種の動物は、形態によって種の特徴を表わすだけでなく、行動においても同様に種の特徴を現わしている。それらは、ともに長い系統発生過程の中で形成されてきている。初期の比較行動学においては、種に固有な本能行動は、神経中枢に自生的に産出される行動に固有な衝動エネルギー (action specific energy) が解放されて生起すると考える。かかる行動が解発されたにもかかわらず、実現を阻止されたとき現われる反応様式の 1 つが転位行動である。転位行動は、実現を阻止されて、その結果残留した行動エネルギーを緊急解放する機能を持つと考えられている。転位行動は、種に特定のパターンがあり、転位行動に充当されるエネルギーは、特定の原衝動が阻止されたとき、滞留したエネルギーだと考えられている。エネルギーが滞留する条件は 1) 解発刺激 (releaser) が本能行動の終結前にその適性を失うとき。つまり解発された単一衝動が阻止されたとき、2) コンフリクトによって、両衝動がせきとめられたとき、3) 行動が予想外に早く終結して、行動エネルギーが余ったと考えられるときである (前田, 1961, 58 頁)。

転位行動の具体的な例としては、次のようなものがある。なわばりの境界で対峙した (闘争事態) オスの棘魚がする倒立姿勢 (造巢行動の 1 つのパターンと考えられている)。セグロカモメで、抱卵行動がスムーズに交替しないときに、待つ個体のする草むしり行動。ニホンザルでは、餌を取りに来たとき、餌を引いて妨害する際に生じる自分の身体をかく行動。ユキホホジロで、闘争場面において生じる睡眠姿勢などがある。転位行動は、ほとんどの種に走型的なパ

ターンがある。以上の例からわかるように、転位行動は場面に対する適応性と、目標に対する指向性を欠くところに特徴がある。「場ちがい」な奇異感を与える行動である。

前田は、通常の、場面に適応した、目標指向性をもった行動を一括して一次反応とし、転位行動をはじめとする心的エネルギーの解放が阻止された際に滞積した余剰エネルギーを放出する過程を一括して二次反応として把握する構想を提出している（前田，1961，53頁）。生物学的に意味のない二次反応の意味を解明するには、二次反応を、生活体が環境との関連において行なう平衡確保を基礎づける過程，すなわち，興奮力学的な秩序形成の過程において位置づけねばならない。つまり二次反応は，心的エネルギーの解放が阻止されて，興奮力学的に歪曲残留の事態で生起し，その際に滞留した心的エネルギーを放出する機能を果す。

前田は，興奮力学的な歪曲残留つまり，滞留した心的エネルギーの解放は，動物における二次反応だけでなく，人間においても，平衡確保の上で重要な意義を持つと考える。そこで，動物に見られる上述の意味の二次反応と人間心理学の文献に見られる，何らかの要求阻止事態で生起する行動を列举している。その中には，代償行動，自発的再開始，困惑行動，攻撃行動，場面離脱，非現実世界への逃避，空想，白昼夢，退行行動，神経症的反応や，Freud, A. の10種の自己防衛機制があげられている。自己防衛機制は，人格形成に阻害的に作用する滞留エネルギーの解放を果すものである。このうち，代償行動，自発的再開始，攻撃行動は一次反応だと見られている。

上記のような行動や機制は，歪曲残留を修正し，生活体の安定化を指向する解放系としてとらえられる。また，それらは，生活体の興奮エネルギー的緊張過程と，現実の要請との間の緩衝系としてもとらえられる。かくして前田は，一般心理学，比較行動学，精神分析学で別個に扱われてきた問題を，生活体の緩衝機能の体系として統一的に考察する視野を提示している（前田，1961，55頁）。

かかる視野は，人間が動物とは異なる特性を持ちながらも，生活体としての生物性を背負っていることを否定できないという認識から生まれているように考えられる。

生物学的人間学の中心考想は，人間が本能的保証をもたない無形式な衝動を与えられている点である。それ故に，文化社会的にパターンづけられて，形式を獲得する可能性も与えられる。つまり，衝動を意識的に支配する可能性が与えられている。しかしながら，その可能性を与えられて，それを実現しているわれわれであるが，それが常に働いているのでないことは，われわれ自身がよく知るところである。つまり，前田が指摘するように，生活体としての生物性を背負いながら，なおかつペルズルたらんとするところに人間の本来的苦悩がはらまれるのである（前田，1961，61頁）

不肖の弟子である筆者は，理解不足であるが，先生の比較心理学的構想の中には，人間の苦悩を体現する人々を理解せんとする精神分析学，精神病理学の理論的背景が色濃く潜んでいると思われる。

しかしながら、このような視野を持ちながらも、人間と動物の共通性と相異性を探る比較の場にあるときは、問題を厳しく限定される。そして考察の焦点は、比較行動学で見い出された転位行動と人間心理学で研究される困惑行動の比較におかれる。人間と動物の相似現象を求めて、人間において意識的で理性的なコントロールの及ばない領域における行動を選ばれるのである。

本稿では、転位行動や困惑行動を中心に扱おうのではないが、ここで困惑行動について注釈的に言及する。

困惑行動とは、教室でのように、衆目の集まる場で教師にたしなめるような場合に生じる頭をかく行動や、緊張した場面ではほとんど無意識になされる髪に手をやる、鼻やははやあごをさわる、眼鏡をさわる、ネクタイをさわる、タバコに火をつけるなどの行動である。土俵に上って、制限時間が迫った力士の体を打つ行動、まわしをさわる行動や、入学試験で受験生が鉛筆を無意味に動かしたり、口に触れたりする行動も困惑行動に入るであろう。

前田によれば、かかる行動は、1) 当該事態に対する即事的適応性を持たない、2) その行動を本来動機づける要求に基づいていない(かいいからかくのではない)という特徴がある。困惑行動の生起する条件は、1) 目標行動が阻止された事態、2) 社会的压力下で自我の安定性が傾く事態、3) 高い緊張状態時に、問題の解決が突然生じた事態に要約される(前田, 1961, 64頁)。これらの点から、行動の特徴、発生条件ともに動物の転位行動に相似した行動であることがわかる。

更に言及すれば、人前で恥ずかしめられて頭をかくことは、われわれの体験するところであるが、これをするとき、われわれは意図的であることが多い。その意図は、反抗する気はなく、はずかしく思っているのだという内面を表現することである。それを見る人にも、その意図が通じ、笑いを誘う。つまり、困惑行動は、表現行動になる可能性を持つ。濡れ場で、かんざしで髪をさわるしぐさが演出家によって振り付けされる。それが、かいいからとか、コンフリクトから結果する滞留するエネルギーの解放のためになされると解すれば、振り付けは意味をなさない。ひそかな挑発的なしぐさとしての意味を持つ表情行動として振り付けされるのである。

動物においても、転位行動は、表情行動、信号行動として儀式化(ritualize)される。例えば、棘魚の倒立や、ユキホホジロの睡眠姿勢は、威嚇の信号行動となるのである。

このように、困惑行動と転位行動は、行動発現の条件、行動の特徴、信号行動への発展という点で相似性を示すことがわかる。しかしながら、相似性ととともに相異性もある。

転位行動は系統発生の過程の中で、種に獲得されたものであるが、困惑行動は個体発生の中で形成されたものである。つまり、困惑行動は、個人により、文化によってスタイル化がなされるが、転位行動は種に定型がある。また、困惑行動は一般に、転位行動のような場ちがいな奇異感はなく、問題意識を持ってこんなとき、何故こんなことをするのだろうという問題意識によってはじめて事態適応性の欠如に気づくような行動である。困惑行動は、転位行動に比較

して多様性と可変性を持ち、つぎつぎに種々のパターンが継起する。このことは、生得的行動様式をほとんど欠き、意識的に衝動を支配しなければならず、目的を設定して、それを果すまで持続して緊張を保たねばならない人間の衝動のあり方を反映すると考えられる。

かかる相似性と相異性を考察して、前田は、単に動物と人間の行動力学の相似性を解明するだけでなく、人間と人間的生活体とのぬい目からもペルソンを理解する道が開けることを示唆する（前田、1961、70頁）。ぬい目からにじみ出るのは、転位性を持った行動や、上述の要求阻止事態で現われる解放系、緩衝系の諸行動を意味しよう。

以上、転位行動、困惑行動などの転位現象に多くのスペースを割いた。それは、要求阻止事態の歪曲残留を修正する意味を持っていた。前田の言う二次反応の考え方は、人間と動物のある種の異常行動の相似性と相異性を探る上でも有効であるように思われる。ある種というのは、ここではいわゆる心因性という意味である。そういったこととの関連で、前田の考え方を最初にあげたのである。本稿では、要求阻止事態の歪曲残留の解放行動と考えられる隔離ザルの常同行動に焦点を当てる。可塑性の大きい幼少時の要求阻止が個体の適応的発達をいかに阻害するかを見て、その発達の歪みをいかなる概念で説明できるかを検討する。その際、特定の常同行動や、隔離ザルの在り方を取り上げ、精神分析学的研究や、発達の心理学的研究の知見が、動物行動の理解にどれくらい有効かを検討することにもなろう。また逆に、動物に形成された心因性の行動障害が人間の研究にどのような意味を持つかという点も検討することになろう。

Ⅱ.

筆者はニホンザルを研究対象とした、母と子を発達早期に分離する、母子隔離実験に参加した。このような実験においては、被験体に種々の行動異常が現われる。それらの行動は、常同行動（Stereotyped behavior）と呼ばれ、それが前田の言った、上述の二次反応の特徴を示すことから、発表された論文の多くにおいて、そこからの発展が目指されているように思われる。

発表された隔離ザルの研究を新たに検討してみると、常同行動の特徴や、発現の機制および、常同行動と社会的行動や外にある対象への関わり方との関連などに焦点が当てられているが、人間の精神障害の研究との比較に焦点を当てた考察は、意図的に除外されてきたように思われる。そのことは、糸魚川が指摘するように（糸魚川、1973、64頁）、1つは動物の内面活動を探ることの難しさのためであろう。また、隔離ザルと、人間の精神障害とを直接比較するのは短絡的であるとの指摘もなされている。サルの隔離場面と自然場面における行動を比較検討して関係づけることができて始めて、人間との比較が可能になると考えるのである。この見解は妥当なものと思う。確かに、母親から隔離された時期にある子ザルが、自然集団でいかなる行動をしているかを知ることが、隔離の影響を調べる上で重要な意味を持つであろう。また、自然集団において、サルがどのように発達するかの一般的な認識が要請されるであろう。

臺のように、サルを対象にした実験研究を、人間の精神障害のモデルとして有用視する立場があるとともに、人間と動物の行動を原理的に区別して、動物実験の結果を無意味とする立場もある。それは人間観や、理論的立場の相異を反映するところであり、両者を和解させるような試みは無意味に近い。

動物の内面性を探ることや、ことばを獲得する以前の乳児の内面性を探ることは、厳密に言えば、ともに客観的に認められる行動を手がかりとする以外に方法はない。人間の初期の母子関係においては、同じ人間として、無意識的なものも含めて、通じ合う信号が相互に備わるとする見解もあり、動物の内面性の理解よりは、通じ合う手がかりは多いことが推測される。しかし、興味深いことは、3カ月より以前の乳児との通じ合いを研究する場合、例えばSpitz, R. A. は、前述した比較行動学の見出しの知見を有効と考えている (Spitz, 1965, 45頁)。そこには、進化の項点にある人間も、個体発生の過程において系統発生過程を再現するという認識があるのかもしれない。しかし、母が抱き上げて哺乳体勢に入ったときに、乳児が口を開いて頭を左右する行動や、乳首をくわえて吸うに到る反応、あるいは微笑を惹起する刺激の研究など、実証的事実にもとづく点があるのも確かである。いづれにしても、かれが参考にする比較行動学は、まさに動物の本能行動を研究対象にしているのである。

Freud, S. がヒステリーをはじめとする神経症の治療法を開発し、そこから一般的発達理論を構築したのは周知のことである。主として成人の神経症の研究から、病因を探るうちに、さかのぼる形で発達理論を構築したと言えよう。Spitz は、それを検証する形で、新生児からの発達を実証的に研究している。大まかに言えば、Freud が構成した、リビドー、攻撃衝動、カセクシス、同一視、快楽原則、現実原則など基本的な理論の枠組が妥当することを見出し、採り入れていると見ることができよう。そして前述したように、初期の母子関係において、ことばが成立していないのに、相互に通じ合うことを説明するために、生得的解発機構という比較行動学の基本的概念を採用している。したがって、Spitz においては、観察実験を重視する実証的態度を取りつつも、乳児の理解に当っては、Freud をはじめとする精神分析学の概念や、発達心理学の Wallon, H. の概念や、Lorenz, や Tinbergen, N. の比較行動学の概念を援用しているのは疑うべくもないことである。つまり、厳密に科学的な実証的な方法だけをとるとすれば、不十分にしか解明できない乳児や動物の内面性の理解を試みる場合には、偉大な天才の先達の考えた概念に示唆を求めるのは、当然のなりゆきであろう。今西は、ニホンザルの自然集団における、順位制の獲得過程や、リーダー的行動の獲得過程を説明するために精神分析学の概念である同一視 (identification) を採り入れる試論を展開している (今西, 1960)。この試論は、前文化の伝播過程の研究において、試論の地位を脱していると言えよう。

Spitz や Bowlby, J. が、動物を研究する理論的立場がいろいろあるうち、比較行動学を重要視しているのは必然性があると思われる。前田が指摘するように (前田, 1961, 62頁),

比較行動学と精神分析学とが類似点を持つからであろう。特に衝動の内因性を強調する点で、類似しているからだと考えられる。快楽原則に見られるように、欲動は即時の完全な満足を求める。阻止されれば、別のチャンネルを通してでも解放を求める。そうした精神分析学の衝動が、比較行動学における衝動と類似しているのは、転位行動発現のメカニズムの考え方からもうかがう。前田が二次反応の構想を、人間と動物を統一的に理解する見通しのものとで打ち出したのも、この類似性によっても考えられる。心理学、中でもアメリカの心理学においては、牧が言うように、人間においても、ほかの動物におけると同じく、外の現実と交渉を持つことが自明のこととされている（牧，1982，66頁）。それに対して、内因性を強調する衝動観においては、衝動は解放されること自体にも意味があり、必ずしも外的適応だけを指すものではないということになる。

心理学においては、Spitz が皮肉を混じえていうように（Spitz, R.A. 1965, 51頁）、動機は扱っても、衝動、情動という問題を避けようとする傾向がある。それは外部の諸条件との関連だけから、行動を見ようとし、内面すなわち、意識に関わる情動を扱いかない領域として、しめ出すような傾向があるからだと思われる。しかし目ざされるのは、理論の抱括性、生産性であり、現実の諸問題への寄与性であって、外との関連だけに焦点をしばることではない。いずれにしても浅学な筆者であるが、乳児の理解に成人の行動理解の概念が用いられ、動物行動理解の概念が用いられていることを見た。動物行動の理解のために、人間を理解する概念を用いることは大きな飛躍を意味するであろうか。筆者は、批判を覚悟の上で、この飛躍を試みることがあるであろう。

前田が考察した転位現象は、正常な生活体にも見られる現象であった。常同行動を現わす隔離ザルは、病的遺伝子を持つかどうか確認されてはいないが、遺伝的には正常な個体と考えられている。また、母親との交渉を絶った隔離飼育という条件によって、行動異常を現わした個体である。しかし常同行動が二次反応であることは確かであろう。つまり、欲求阻止事態で現れる歪曲残留を解放する機能を持つ行動であろう。

隔離飼育を組織的に研究を始めたのは、Harlow, H. F. である。彼は母子間の愛情が、どのように成立するかを明らかにするために、アカゲザルの子を母親から離して実験に用いた。母親から分離したのは、種々の刺激個体や、母親模型の効果を明らかにする上で、条件を統制するためであった。そのうち、そうしたサルが行動異常を表わすところから、研究の重点は、人間の精神障害のモデルとして、母親からの隔離そのものの影響へと移っている。前述した臺は、隔離ザルが、早期幼児自閉症のモデルか、うつ病のそれかを問題にしたことがある。そのいずれかは問わないが、かなり重篤な症状と見られているのはまちがいない。つぎに、隔離ザルの常同行動について具体的に述べる。

Ⅲ.

南は、常同行動のパターンを、次の3つに分類している（南，1977，189頁）。1）口を用いて自分の身体にかかわる行動（手足の親指やペニスを吸ったり，なめたりする行動），2）手足を用いて自分の身体にかかわる行動（胸や腕，脚を抱く行動や，自分の身体の毛をひく行動など），3）位置移動性の常同行動（トンボ返りや，天井にぶら下って体を前後，左右に揺する行動など）。

このうち，1），2）は比較的早期に（0から193日）隔離された個体に発見し，3）は比較的遅くに（90から751日）隔離された個体に発現している。更に，長期にわたって追跡した研究によると，自己へ向けられた攻撃行動，自慰行動や奇妙な行動（bizarre movent）が発現してくる。

根ヶ山は，南の分類の外に，Berkson，などの研究を参考にして反復性の常同行動（身体の前後揺りや左右揺りなど）と非反復性の常同行動（指しゃぶり，特異な姿勢など）に分ける分類を示している（根ヶ山，1978，21頁）。この分類は行動形態によるだけでなく，発現する事態要因にも特徴があり，前者は個体の興奮を高める事態で増加し，後者は物体への慣れなど興奮の低い事態で生起する。

ここでは，自分の身体の一部を抱く行動と，手足の指や，身体の一部を吸う行動に注目する。南が指摘したように，これらの行動は，母親からの隔離が早い時期になされた個体に表れる。これらの行動は，大阪大学におけるケースに限ると，107日以前に隔離されたケースで生じている。その中には，出生当日に隔離されたものも含む。隔離時期の早いものから検討をはじめめる。糸魚川は，生後24時間以内に隔離されたオスのケースについて述べている（糸魚川，1976，11～12頁）。隔離後3週間をピークにして数多くのタイプの行動が現われ，舌をぺちゃぺちゃ動かしたり，手指，足指をなめる行動が集中的に多くなる。このような行動は，5週以後も多発し，常同行動になる。他のタイプの行動としては，体の1部をつかむ，頭を左右に振る，腕や脚を上げる，頭を壁につける，頭を床につけるなどの行動が見られる、これらの行動は，母親に向けられるべき行動と考えられている。結局，この個体に常同行動として固着した行動は，手の親指しゃぶりと，胸をかかえる行動であった。

指しゃぶりのような常同行動は，隔離後すぐ発現するのではなく，初めは舌をぺちゃぺちゃ動かしたりする行動から，指しゃぶりに変化している。糸魚川は，これらの常同行動の特徴を，もっぱら自分の体にかかわることであり，自閉的な行動と言えると述べている。これらの行動は，交わる相手がいない檻の中では現れて当然の行動で，このような自閉的行動をすることによって，隔離場面で生きているのである。しかし，隔離場面への適応的な役割には限界があり，このように生み出された変化は，その個体の幅広い適応括動に歪みを与えていると述べている。

この陳述に関しては、客観的に認められる事実の範囲内に用語を限定するかぎり、隔離ザルの特徴を、これ以上に巧みに言い表わすことはできない。しかし、ここでひとまず提起しておきたいのは、次のような疑問である。何故、隔離ザルが自分の身体にかかわる行動を表わし、特定のパターンに固着するようになるのか。何故、幅広い適応活動に歪みが出るのか。といった疑問である。これらの疑問には、今のところ外に表れた客観的事実をふまえた答は出せないであろう。

中枢神経組織が、人間と比較してより単純なサルにおいては、出生時の成熟度や、その後の成長の速度は大であると考えられる（糸魚川、1973、61頁）。自然集団においては、子ザルは、2ヶ月前後、遅く見積っても3ヶ月経過すれば、母を識別することが認められる。人間においては、その時期は、Spitzのいう8ヶ月不安の現われる6ヶ月以後になろう。Spitzは、出生の過程から人間の赤ん坊を観察し、不安の発達する最初の生活週間から、5、6週までの期間を、不安の発達する最初の段階だと考えている（Spitz、1965、57頁）。この頃の表われは、不安というよりは不快の表出で、それは、後の本来的な不安と原因は同じであろうが、生理学的緊張状態に対する反応だと述べている。また彼は、生後1カ月以内にでも、自分を受容しない母親への反応として、昏睡状態に陥ったり、嘔吐をしはじめる乳児の例をあげている。Bowlby は、あいまいな言い方ではあるが、生後間もなく、母子分離が叫喚を惹き起すと述べている。母親との近接をはたすまで、この本能的な行動体系は働らき続ける。この状態の主観的側面が原初的不安（Primary anxiety）であると述べている（Bowlby、1960、93頁）。このような知見をふまえれば、発達速度の速いサルにおいて、生後24時間以内の隔離が、不安ないしは内部緊張を高めることを結果するのは、当然考えてしかるべきように思われる。しがみつ き、支えられ、皮膚接触をし、吸乳行動を向ける母親がいないことは、漸時増大する生理的緊張を結果し、不安を産むであろう。上に提起した疑問は、このような生理的緊張、ひいては不安といった情動的な概念を想定することを要請しているように思われる。またかかる情動は、幼少時においては、もともと乏しい外向きの関心を断ち、情動本来の内向きを結果することになろう。ここでは、隔離ザルの状況を理解するためには、情動的概念が必要ではないかという点だけを指摘して、次に90日前後で隔離された例について述べ、その後でもう1度、何故自閉的行動が表れるのかという点に立ちもどることにする。

筆者が多く関わった隔離ザルのケースは、88日目と107日目に隔離されたものである。かれらは、隔離されるまでは、実験室の檻で母親とともに生活した。

自然集団においては、幼体と母との接触が急激に減少して、幼体と他個体との社会的接触が始まるのは、生後1.5から2.5カ月頃である（糸魚川、1967、26頁）。そして、3カ月前後経過すると、当年生れの幼体が集まって遊ぶことが見られる。集団が移動するときには、母と子は互いに相手を探して一緒になる。

実験室における飼育場面の研究によると、幼体の母へのしがみつきは最初の1カ月間では観

察時間の80%以上を占める。2カ月目には、急激に減少し、その後3、4カ月まで漸減する。また、幼体の位置移動は、生後3、4カ月まで急激に増加し、その後は横ばいの安定した状態が続く（南，1977，193頁）。これらの観察の結果は、自黙集団での発達と実験室での発達が相似していることを表わしている。

実験室の檻の中では、子が母から遠ざかることは不可能であるが、これらのサルが隔離された生後3カ月頃の時期は、自然集団においては、子が母から時間の単位で離れていることがあり、また、子が母を識別していることが明らかな時期である。

Bowlbyは、15カ月から30カ月の人間の健常児が、入院などの理由で、母親から分離された場合を観察し、分離が長びくにつれて、次の3つの時相が表われることを定式化している。すなわち、1）訴求（protest）の時期、2）絶望（despair）の時期、3）愛着切り離し（detachment）の時期がそれである（Bowlby, 1960, 90頁）

Spitzは過去最小限6カ月間、母と良い関係を持った後で、母親から引き離されたケースを研究している（Spitz, 1965, 135頁）。それらにおいては、分離期間が長びくにつれて、重い症状を呈することを見出し、アナクリテックな抑うつ症とよんだ。分離期間の長さによって表れる行動の特徴は、次のようにまとめられている。

1カ月一泣き易く、気むずかしく、接近する観察者にとりつく。

2カ月一泣きは叫びに変わる。体重が減り、発達は止まる。

3カ月一接触を拒む。腹ばいに横たわる（Pathognomische Position）。睡眠障害が生じ、体重減少が止らない。併発症が起り易くなる。運動が緩漫になり、硬い顔面表情を表わす。

3カ月以後一表情の硬さが慢性化する。泣き叫びは止まるが、シクシク泣きをするようになる。運動の緩漫さが顕著になる。

こうして、3カ月から5カ月の間に危機的時期が経過する、その前に適切な母親の代理者をつくることのできるならば、上述の表われは、驚くほどの速さでなくなるという。

こうした経過から、少くとも、しだいに緊張が増大し、身体症状を表わし、外界を疎外するとじこもり傾向を示すことがうかがわれる。

またアメリカの乳児院の研究では、3カ月で離乳されて、その後、平的10人かそれ以上の子どもを1人の看護婦が養育する条件で、生活する子どもたちが扱われている。そこでは、4歳まで観察されたが、運動能力、種々の基本的生活習慣にきわだった遅れが表われている。研究対象となった91人のうち、1年以内に29.6%が死亡し、2年目の間に7.7%が死亡している。

このような、人間における母親からの分離の研究では、1人だけで隔離されるという条件でないことは当然である。しかしいづれの場合も、母親からの分離の後、栄養や衛生の面には配慮がなされているが、未熟練の看護婦とか、1人の看護婦が多くの子どもを養護するとか、看護婦が度々入れ替わるなどの人的環境条件や、その輻奏が指摘されている。

Spitzは、上に上げたような、母親から分離された例以外に、母親とともに生活している例

で、母親の側にある心理的問題によって、子どもに対する行動が不適切であるために、子どもに緊張が増大し、いろいろの症状が表れる例をあげている（Spitz, 1965, 104～134頁）。母親の側にある問題というのは、たとえば、子どもを受容できずに拒否的態度を取る例や、子どもに心を開けない過保護や、急激に移り変る気分の動揺や、操うつ病による波長の長い気分の変化などがあげられている。そこにあげられている子どもの症状は、1 時的呼吸停止、昏睡状態、嘔吐、3 カ月疝痛、アトピー性皮膚炎、前後動揺、糞尿のもて遊びと糞食などであり、多くは、身体的症状である。最後の2つが行動的な異常である。その理由としては、1 つには取り扱われた子どもが幼ないことがあると考えられる。

組織段階が複雑な人間にあたっては、新生児の無能さは著しい。3 カ月以前においては特に、心と身体の分化が十分でなく、心理的構造や機能は、未だ分化、独立していない。したがって、このような段階においては、母子関係の障害に対する表われは、身体的なものが強く、優勢である。自我形成がなされた後になると、心的な行動上の異常が支配的になるとSpitzは考えている。自我形成以前においては、生理的機能と心理的機能は未分化で融合しており、身体的原因と心理的原因との相互の交錯が起ると述べている（Spitz, 1965, 117頁）。

生後間もなく隔離されたサルの場合、発表されることはないが、室温調節の不手際や、金網にこすってできた傷の化膿が原因で死亡することがある。そこには、身体的原因だけでなく、抵抗力を弱めるような心理的なものの影響もあるのかもしれない。また、研究者が身体的異常にはあまり注意を向けない傾向があることも否定できないが、隔離ザルの場合には生後間もなく隔離された場合でも行動上の異常が目立ち、それが注目されてきている。こうした人間とサルとの相異点は、出生時の成熟度の相異と発達速度の相異を反映するのであろう。ここで再び3 カ月前後で隔離されたサルの話にもどる。

隔離されたサルの行動は、はじめは、自然集団で母を見失った子ザルのように、高音の音声を出し続け、檻の中をせわしなく走り廻り、高い所によじ登って、母を探すような行動を表わす。これはBowlby の言った訴求する段階の行動をほうふつとさせる。翌日には、疲労を感じさせる様な放心状態を表わし、活動性は低下する。これは、絶望の時期に相当するであろう。整理された資料を欠くのであるが、そのうちに糸魚川があげた例のように、自分の身体にかかわる行動が表われ、特定の行動が固着して行くと考えられる。結果として、88日目に隔離された個体は、ひざを抱くこと、ペニスのサッキングが固着し、107日目に隔離された個体には、ひざを抱くこと、ひざのサッキングが固着した。

かれらにおいては、自然集団における同月齢の個体と同様に、生得的と考えられる、しがみつき、追従、吸乳、鳴きなどの母親に向ける行動を統合して、母を母として識別できる段階に到っていると推測される。つまり、母親との絆が真の対象関係として成立していると考えられる。

Bowlby は、人間の子どもで、母親との分離後の、訴求する行動を表わす子どもを支配する情

動として分離不安を置く。絶望を表わす時期の情動として悲哀（mourning）を置く。

悲しみという情動をサルに認めるのは、筆者自身抵抗を感じるのであるが、少なくとも、絆が成立している対象関係を断つことが不安を産むことは、隔離後の動揺の激しさから十分に推測できる。その後、活動性が低下し、自閉的な行動を表わしてくるのである。

南は、常同行動について、自発的に生起する衝動による内部緊張を、本来向けられるべき対象に最も類似した手近にある刺激によって解消しようとするものであると述べている（南，1977，197頁）。このような外に向けられるべき行動が代償的に自分の身体に向けられるという考え方をする研究者は、Berkson をはじめとして多い。南は常同行動の1つとしての指しゃぶりについて、吸う行動が異常なだけでなく、向けられた対象が異常であると述べている。自分の身体の1部に向けることによって、内部の平衡維持に成功したとしても、外的な適応に歪みが生じるのである

サルの場合、新生児において、行動体制がより分化し、成熟しているのは前述した通りである。人間の場合、サッキングの体制は、生得的にでき上っているが、自分の指を口の中に入れる運動の協応が成立するには、数カ月間を要する。一般に、動物の衝動が生得的形式を持つと言われることは、かれらの新生児において生得的形式を可能にするだけの、感覚体制およびその協応体制が成立していることを意味しよう。

Spitz は前述した死亡率の高い乳児院での子どもたちの状況について、次のように述べている。これらの子どもたちは、一次的自己愛に退行していると。それは二次的自己愛の場合のように、もはや、親指を吸うことを含めて、自分の身体を対象とすることはないと述べている。自己愛という精神分析学における概念を、そのまま隔離ザルの行動に適用するつもりはないが、それが、内向きの情動を言い表わしているのは確かであろう。一次的自己愛は、内外の未分化な内部環境の中でのみ生活する時期に表われるものであり、二次的自己愛は、内と外が分化しはじめ、リビドー対象が形成された時期に表われると考えることができよう。その時期には自分の身体を対象にして、サッキングなどの行動を向けることができるようになることを示唆している。

いずれにしても、上述したような、人間の乳児の例や、隔離ザルにおいては、欲求阻止による歪曲残留が結果していると思われることができる。

Bowlby は、自分の考える分離不安の特徴を示す過程で、Freud の考え方が自分の考え方に近いと見ている。Freud は、不安神経症において病原となる不安は、解放されえないリビドーの不安への変形（transformation）によると見て、子どもが愛する人から分離されたときに観察される不安はこの例だと考える。かかる状況において、子どものリビドーは、満されなままにとどまり、不安に変形されると。Bowlbyは、どのような行動であっても、本能的な行動体系が解発されているのに、終結をみないときには、常に不安が生じると考える。分離不安はその1例であり、最も病源的であるという。これらの考え方では、不安そのものが、欲求

を阻止されて滞留するエネルギーの解放過程と見られているのか。Freud の用語を使えば、快感原則に従がう過程と見られているのか。あるいはそのように生じた不安が、快感原則に従がう不適応行動のきっかけになるのか。この辺の事情はわからないのであるが、筆者は、人間においては前者のような不安がありうると考えるが、少なくとも動物においては、不安は後者のように働らくのではないかと推測する。それは単なる推測にすぎないが、このうちの、いずれであっても、不安が外の現実を疎外した状況で生じたり、疎外するように働らくという解釈は成立するであろう。しかし、欲求阻止事態で生起する情動が不安であっても、緊張であっても、欲求阻止事態で発現する行動の意味は、前田の構想した歪曲残留を修正する二次反応に思い到るとき、情動の内容を括弧に入れて、意義深く理解できるように考えられる。つまり情動の内容を問わずに、不適応行動の意味を問うことが可能になり、人間と動物を比較する可能性が開ける。師の考察の深さと慎重さに感銘するばかりである。つまり、歪曲残留を修正する二次反応であるからこそ、つまり、外への適応より、余剰エネルギーを解放することが重要視されるから、欲求阻止事態における行動は、外の現実への適応を欠くのである。二次反応は、歪曲残留を修正し、内部平衡をとりもどすところに意味があり、外の現実を無視してでも、それがより緊急を要する大事な仕事であるということになろう。そのように考えるとき、常同行動を現わす隔離ザルの自閉性を理解するいとぐちが開かれる。隔離ザルは、自分の身体に関わる常同行動を表わした。それは、母に向けるべき行動を二次反応として代償的に自分の身体に向けたのであろう。しかし、二次反応は、内部平衡の回復を目指すものであり、その個体が置かれている現実の問題状況を解決するものではない。

前田が言うように、代償行動は、目標指向性を欠いておらず、事態適応性を備えた行動である。代償行動が原行動の代償性を果すためには、両者が力学的関連を持っていなければならず、密接な機能交流が存在していなければならない。したがって代償行動は、欲求阻止事態そのものを心理学的に消滅させる可能性を持つ（前田、1961、55～56頁）。

自分の身体に向けられた行動が、ある程度の代償性を持つとしても、自分の身体が母親のはたす能動的役割を代償することは不可能であろう。したがって、自分の身体にかかわることによって、歪曲残留は、ある程度解放されるとしても、母がもどらないかぎり、事態の解決にはならず、大部分持続的に滞留することになるだろう。こうして、自分に向けられた行動は、わずかな代償性によって固着し、それを表わすサルは、外の現実を疎外する自閉的生活を続けることになるだろう。このようにして、隔離ザルの在り方として、とじこもり傾向が定着していくであろう。かくして、常同行動が何故固着するか、隔離ザルが何故現実への適応に歪みを表わすかは説明できるように思われる。このように見るとき、問題になるのは、前田が代償行動を原行動とは別の行動と考えられているのは事実であるが、前述したように、代償行動を、問題事態を心理学的に消滅させる可能性によって、一次反応と考えている点である。隔離ザルの自分の体に向けられた行動は、ことばの意味として代償的であると言えようが、前田の言う代

償行動の範疇には入らない。しかし、隔離ザルの常同行動は、欲求阻止事態で表われ、外への適応性を欠く点で、二次反応と考えられるべき性質を持つ。かかる行動をどのようによぶべきか、わからないが、ここでは代償行動的な二次反応としてとらえたい。かくとらえれば、上述の説明は生き残ることができる。

しかし、未だ残るのは、何故サッキングや抱きつく行動を自分の身体に向けるようになるかであろう。

おそらく Berkson や南の言うように、身近にあること、母親に以ていることが要因になるのかもしれない。

牧は、Spitz が Freud の情動概念と、Wallon の情動概念の両者を取り入れていることを指摘している（牧，1982，166～173頁）。牧自身は、両者の扱った情動の異なった側面は、情動の全体的把握にとって相補的な2側面だと考えている。Wallon の場合は、情動の表現を支える身体的、緊張的基盤を強調する。Wallon は、情動を、内臓と運動器官との緊張活動と、それに対応する内部感覚、自己受容感覚との中枢を介しての相互作用という観点から考察している。知覚体制を発達的に見ると、内部感覚、自己受容感覚は、出生児から機能し、外部感覚の機能は働らくのが遅く、強い刺激が加えられた場合にも、刺激とは関係のない局所反射を惹起するにすぎない。

母親に向けられる欲求の阻止は、しだいに緊張を産み、身体感覚を生じさせるであろう。つまり、母親がいない不安、緊張は、外部感覚を妨害し、しだいに身体感覚としてとらえられ、それだけが目立つことになるであろう。そのことが、サッキングや抱く行動を自分の身体に向けるようになる基本的条件のように考えられるのである。前述したように、外の現実を疎外し、自閉的世界にとじこもりがちになる隔離ザルにとって、内部感覚、自己受容感覚が働き、外部感覚が内を向くことが、後に現われる自慰行動や自傷行動といった行動の発現に重要な意味を持つてくることが推測される。これらの行動に関しては、次の機会にゆずり、本稿では、自分の身体に向けられたサッキング、抱く行動という常同行動だけに焦点を当てるにとどめる。

IV.

人間乳児における、母親との分離や、母親の側に問題のある母子関係の異常から結果する、いわゆる心因性の症状を参考にしながら、隔離ザルの常同行動を理解しようとした。成功したとは思わないが、情動概念を動物の行動に適用する試みをした。

精神分析学の右派による乳幼児の行動研究は、Freud が神経症の症状形成の要因になると考えた幼少時の心的外傷を、成長発達する方向から実証的に研究しようとしていると言えよう。Spitz や Bowlby は、乳幼児期の心的外傷による身体的、行動的異常がたとえ、成熟や、母性行動の回復によって、おさまったとしても、将来にまで病根としてとどまることを推測して

いる。このような子どもたちを追跡する研究も表われている。しかし、その実証性に関しては疑問が残る。

本稿で言及した隔離ザルについては、10才の時点でメスと出会わせたときの観察結果を以前に報告した（鵜飼，1977）が、とじこもり傾向が目立った。現在20才で健在であるが、幼少時の行動を持ちこしていることは明らかである。一般に、サル的生活年齢の2.5倍が人間での年齢に相当していると言われるから、かれらは現在、人間で言えば、50才になる。したがって、幼少時の心的外傷がいつまでも尾をひくことは、人間とともに霊長目に属する隔離ザルの例が実証しているように考えられるのである。

参考文献

- 前田嘉明 1961 困惑行動の転位性について—人間と動物における緊張解放の過程—海星女子学院短大
研究紀要 NO.1.
- 糸魚川直祐 1967 霊長類における行動発達研究 待兼山論叢 創刊号
- 糸魚川直祐 1973 サルの母子隔離実験の問題点 季刊人類学 4—3.
- 糸魚川直祐 1976 生得と学習—ニホンザルの行動について— 遺伝 1976年11月号.
- 今西錦司 1960 ニホンザル研究の現状と課題—とくにアイデンティフィケーションの問題について—
Primates, Vol.1, No.1.
- 牧 康夫 1982 人間探求の心理学 アカデミヤ出版会
- Spitz, R.A. 古賀行義訳 1965 母子関係の成り立ち—生後1年間における乳児の直接観察—
同文書院
- 南 徹弘 1977 霊長類における幼体の行動発達と初期母子関係—常同行動の比較行動学的分析—
大阪大学人間科学部紀要 第3巻
- 根ヶ山光一 1978 隔離飼育霊長類の常同行動 心理学評論 Vol.21, No.1.
- Bowlby, J, 1960 Separation anxiety. International journal of psycho-analysis. Vol.
XLI part 2—3.
- 鵜飼信行 1977 隔離ザルの社会行動—性行動を中心に—佛教大学人文学論集 第11号.